

「いらっしやいませ」

「クリーニングをお願いします」と言って、カウンターに洗濯物を乗せた。

「当店のご利用は初めてですか？」

「はい、そうです」

「ではお名前とご連絡先をお願いします」

「ウエハラです。電話が二一一一八五一です」

「ウエハラ様の漢字は、上下の『上』に原っぱの『原』でよろしいですか？」

「いいえ、きへんの『植える』という字に原っぱの『原』になります」

「はい、わかりました・・・」店員は早速受付票に植原の名前を記入して、洗濯物の仕分けを始めた。

「ジャケットが二枚、こちらはドライクリーニングのスタンダードコース、カシミヤのセーターが一点、こちらはエクセレントコースになります。ワイシャツが三枚、ズボンが一本、こちらはスタンダードコースです。それからダウンジャケットが一枚ですね。こちらはエクセレントコースになります。以上八点でよろしいですか？」

「はい、結構です」

店員は記入を終えると、電卓に金額を打ち込んで会計を始めた。

「ドライクリーニングの物は、明日の一時以降ならお渡しできます。エクセレントコースの物は一週間程お時間かかりますので」

「一週間ですか？ もう少し早くなりませんか？」

「お急ぎでしたら、エクспレスコースにすることもできますが」

「エクспレスコースでしたらいつでもできますか？」

「三、四日後になりますので、五日の仕上がりになります」

「五日ですか・・・このカシミヤのセーターなんですけど、どうしても明後日着る予定にしているので、なんとかそれまでにお願いできないでしょうか？」

店員はカレンダーに目をやりながら、

「わかりました。こちらは大至急ということで、明日業者さんに話しておきます」

「お願いします。無理言つてすみません」

「それでは植原様、お会計の方が全部で五千八百円になります」

植原は財布から一万円札を取り出して店員に渡した。

「一万円お預かりします。少々お待ちください」

店員はおつりとレシート、それから控えの用紙とサービスカードを差し出した。

「こちらは、サービスカードになります。スタンプが一杯になりますと、五百円の割引になります。それから、お誕生日にご来店いただきますと、全て半額になりますのでどうぞご利用下さい。」

「わかりました。ではお願いします」

植原はサービスカードとレシートと控えをもらって出口に向かい、

「ありがとうございました」という店員の声を背後に聞きながら店を出た。